巻頭エッセイ

コミュニケーション能力とSLA研究

佐野 富士子（駿河台大学助教授）

近頃の“17歳の犯行”を聞くにつけ，なぜそこまでストレスをため込んでいたのだろう，なぜひとりで悩んでいたのだろう，なぜ悩みを誰かに相談しなかったのだろう，と思うとやり切れない気持ちになる。気持ちが押しつぶされているときは問題の整理ができず，人に伝えることができないものではあるが，自分の苦しい気持ちを表現する技術を身につけていない子どもたちが，自己アピールしたい欲求，認められたい欲求を満たすことができず，親にも教師にも打ち明けられず，ひとり悶々としていたと思うと本当に心が痛む。

このように，日本語でさえ効果的にコミュニケーションすることは難しいのであるから，外国語でそれを行うのは更に難しいにちがいない。しかし幸いなことに，近年応用言語学が盛んになり，特に第2言語習得論（SLA）は領域の広がりと共に様々な成果を出してきている。そこから示唆が得られるかもしれない。例えば，コミュニケーション能力は，1）ことばの形に関する規則を正しく使う能力（文法能力），2）社会的，文化的に適切なことばを使用する能力（社会言語学的能力），3）まとまった話をしたり書いたりする能力（談話能力），4）自分の英語力の不足を補ってコミュニケーションする能力（方略能力），の4つの要素から構成されているとする説が最も有力である。日本語でのコミュニケーションにもこの知識を転移させて，より効果的にはできないものだろうか。

例えば，文法的には正しくても何を言わんとしているのか意図がわからない文章を書いてしまうケースには，出来事が起こった順に説明する，例示を用いてわかりやすく説明する，意見の表明と共にその根拠や理由を示す，などの指導が有効であろう。会話の場面でも　a）ただ please を付ければ丁寧な依頼表現になると思い込み，相手に応じた適切な依頼表現を使えない，b）謝罪表現になぜ謝らなくてはいけない状況に陥ったかの説明が添えられていない，c）誘いや申し出の断り方が適切でないため相手に誤解を与えてしまうなど，意図したことが伝わらないケースには，コミュニケーションの4要素，特に相手の社会，文化における会話規則／文章構成規則，問題解決の方略を知識として与え，実際にことばとして使ってみるようにさせることが有効であろう。

このような授業を英語の時間に行うと，日本語にも意識がおよぶようになり，普遍的なコミュニケーションの原理が見えてくるのではないだろうか。コミュニケーションには発信者と受信者がいるので，互換性のあるコミュニケーション・ツールとルールを用いること，自分のメッセージを相手が理解できるかどうかを想像してみること，相手の言わんとしていることをわかろうとする積極的な気持ちをもつことの必要性と重要性を認識できる。ことばの発信者と受信者の共存，共生，協力の時代である。